

調査からみえてくるこれからのお寺

二〇二二（令和三）年七月一日より、第十一回宗勢基本調査を実施しています。すでにご回答いただいているご寺院の皆さま、ありがとうございました。

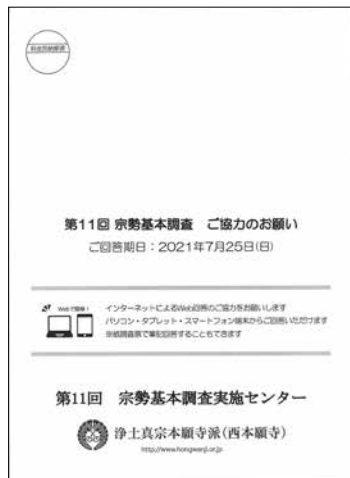
ただ、未だ回収率が十分ではありません。ご回答がお済みでないご寺院は、急ぎご回答をお願いいたします。皆さまのご協力が宗門の現実を明らかにし、宗門の未来を切り拓くための要素となります。

本稿では、本誌（『宗報』）に、二〇二〇（令和二）年の二月号から七月号にかけて連載した「第十一回宗勢基本調査に向けて」の記事をもとに、改めて本調査の特徴や新しい試みなどを報告いたします。

なお、回答の締切は七月二十五日となっております。急ぎ、ご回答にご協力くださいますようお願いいたします。

本願寺派では、他の仏教教団に先駆けて、一九五九（昭和三十四）年から、宗派に所属する一般寺院全体の動向を把握するための調査を実施してきました。概ね五年ごとに寺院の基本情報や周辺地域、施設や寺族の状況、法務や門信徒の現況などについて調査してきました。第一回調査から、実に六〇年以上の長きにわたり、寺院の現状把握を中心とした調

査を継続的に実施してきたことになりました（詳細は、本誌掲載の長岡岳澄（第十一回宗勢基本調査実施センター調査研究員）執筆「第十一回宗勢基本調査に向けて 第一回」（二〇二〇年二月号）参照）。では、このように、継続的な調査をすることで何がみえてくるのでしょうか。



五〇年前の調査との比較

連載の第二回(二〇二〇年三月号)では、分析結果が比較しやすい最も古い調査として第三回調査(一九七〇年実施)をとりあげ、最新の調査である第十回調査(二〇一五年実施)との比較を行っています。ここでは、寺院運営や法要儀式などから、その変化を追っています。

例えば、寺院の墓地・納骨堂の所有率について焦点をあててみると、本願寺派に所属する寺院の墓地所有率は、第三回、第十回ともに四〇%弱と数値にあまり変化はありませんでした。しかし、納骨堂の所有率は第三回では二二・〇%であったのに対し、第十回では三三・八%と一〇ポイント以上の増加がみられました。

この数値の変化は、人口の流動化が影響したものと考えられます。第三回調査が行われた一九七〇年代は高度経済成長期のまっただ中でした。入学や就職を転

機に、地方から大都市部へと、多くの人が移り住むようになりました。都市部への人口流入は現在も続いています。この五〇年でふるさとから離れて暮らす門信徒が増加したこと、さらにその門信徒が移動を繰り返していることは、皆さまま実感されていることだろうと思います。このような定住↓移住という流れが一つの要因となって、求めやすい「納骨堂」が選ばれていったと考えられます。

また、少子化や家族の小規模化も影響を与えました。すでに、日本社会は核家族化から一人世帯の増加という局面に入りつつありますが、このことが墓地の継承を困難にし、墓地以外の方法で埋葬する傾向が進んでいることが宗勢調査からも確認されたわけです。

今回の調査では、埋葬の多様化についての新たな問いを設け、この問題を深く掘りさげる予定です。

継続して行う調査でみてくるもの

本願寺派が行っている宗勢基本調査の他にも、長期的に継続して行う調査はたくさんあります。国が行う「国勢調査」はその代表格といってよいでしょう。また、統計数理研究所が行っている「日本人の国民性調査」も一九五三（昭和二十八）年から五年ごとに行っている継続性の高い調査です。

統計学の第一人者である林文先生（はやしみ第十一回宗勢基本調査実施センター調査研究員）は、この調査結果の一部を本誌（二〇二〇年四月号）のなかで紹介されています。

「日本人の国民性調査」のなかに、「あなたまたは『あの世』というものを、信じていますか？」という質問があります。「信じる」と回答された方が、一九五八（昭和三十三年）では二〇%、二〇〇八（平成二〇）年では三三%で、「信じる」人が増えています。さらに、年齢別でみる

と非常に興味深い結果が確認できました。

一九五八年では、高齢世代に「信じる」人が多かったのですが、五〇年後の二〇〇八年では、若年世代に「信じる」人が多いという結果が出たのです。

「あの世」を「信じる」のは、古い考え方で高齢世代に多いと思っっている方がほとんどではないでしょうか。しかし、日本社会をみると、一九五八年は戦後の復興をめざし経済成長率も上昇している時代でした。一方、二〇〇八年はリーマンショックが起き、世界全体が経済的混乱の中にありました。このように、同じ「若者」であっても、取り巻く時代状況が大きく変化しており、それが価値観にも大きく影響を与えているのです。

寺院としても、五〇年前の若者（いまの高齢世代）と同じように、現在の若年世代を捉えてしまうと、さまざまな誤解を生んでしまうことでしょう。

このような時代の変化を明確に数値として認識するためにも、長期的に継続し

て行う調査は不可欠なのです。

特に現在は、新型コロナウイルス感染症のまん延が時代の変化を加速化させていると言われています。変化の時代においては、調査が一層重要な意味を持ちます。

あらたな調査〈宗教者の幸福〉

ここからは、第十一回で初めて試みる調査内容についてご紹介しましょう。

まず、「宗教者の幸福」については、宗教社会学が専門の櫻井義秀先生（さくらいよしひで北海道大学教授、第十一回宗勢基本調査実施センター調査研究員）は、本誌（二〇二〇年六月号）のなかで、「宗教と健康・幸福」をテーマに掲げ論じられています。

昨今、ウェルビーイング（幸福）に関する調査が注目され、研究が進んでいます。ウェルビーイングとは、主観的幸福（「今日はいい感じ」など）と客観的生活基盤（仕事と社会保障）からなる「しあわせ」の構成的概念です。主観的幸福

感に最も影響を与えるのは、健康とソーシャルキャピタル（良好な職場や地域の人間関係と、それに基づく安心感や信頼感）、精神的ゆとりを生む時間や場所をもつことです。さらに、人々の幸福感と宗教が生み出す精神的安寧は大きな関連があると、世界各地の論文が明らかにしています。

ところが、日本では、ウェルビーイングと宗教の関連を問う研究がほとんど進んでいませんでした。世俗化の傾向が強くと、学術や医療、福祉、教育などの公共領域と宗教とが切り離されている日本特有の問題が要因の一つと考えられています。

このような状況のなか、櫻井先生は、西欧と日本の違いについて興味深い発見をされました。西欧では宗教活動をする人の幸福感が高い傾向であるのに対し、日本では宗教団体に所属しているか否かだけでは幸福度に関して統計的に有意な違いが出なかったのです。統計的な違いが出たのは、宗教団体に所属し、かつ「宗

教的な心は大切」と思っている人の場合でした。この結果は、寺院運営を考える上で、重要な意味を持つと考えられます。

今回の宗勢調査で実施する宗教者（僧侶）を対象を絞ったウェルビーイング調査は、日本では例の無い調査です。

猪口孝『データから読むアジアの幸福度』（岩波書店、二〇一四年）では、東アジアの幸福度は低く、宗教が広く受け入れられ浸透している東南アジアや南アジアでは幸福度が高いと指摘されています。第十一回調査では、幸福に関する設問を通して「宗教的な心」と「幸福」との関わりについて分析を進めたいと考えています。

あらたな調査

寺院診断・新型コロナウイルス

ルス感染症の影響

さらにあらたな試みとして「寺院診断」、そして現在も世界各国にまん延し

ている「新型コロナウイルス感染症の影響」に関連する設問を作成しました。

▼「寺院診断」

「寺院診断」とは、宗門総合振興計画の取り組みの一環として診断を希望される寺院に対して、宗勢基本調査の調査結果をもとに外部研究機関（株）大和総研が分析を行い、寺院の現状と今後の運営のヒントを無償でお届けするものです。各寺院の運営に活かしていただけだと思います。詳細は、本誌（二〇二一年六月号）に掲載された記事をご覧ください。

これまで、宗派では宗勢基本調査をはじめ、さまざまな調査を行ってきましたが、（寺院を特定しないことが本調査の原則であり）一か寺一か寺の具体的な課題や問題点への言及ができなかったという反省点がありました。調査を行うだけでなく、調査からみえてきたことを、きちんと分析し、一か寺一か寺にお返ししていくことで、それぞれの寺院のお役

に立てるのではないかと考えております。「寺院診断」は宗勢調査に回答し、診断を希望された寺院のみに、分析を担当する(株)大和総研から送付されるものです。ご注意ください。なお調査の集計・分析は(株)大和総研に委託して実施するため、個別の回答結果をはじめ、各寺院の情報について宗門は一切把握することはできません。

▼「新型コロナウイルス感染症の影響」に関する設問

さらに、今回の調査では、「新型コロナウイルス感染症の影響」に関する設問を準備いたしました。本来なら、この第十一回調査は、昨年(二〇二〇年)七月一日を基準日として実施する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によって一年間延期となりました。しかし、この感染症は、未だに終息の気配を見せず、全世界に大きな被害を生み続けています(調査延期の詳細については、本誌(二〇二〇年七月号)を参照)。

それは寺院も例外ではなく、法要や法務の延期や中止、門信徒との関わりの変容など、寺院のあり方を大きく変えざるをえない状況が続いています。このようななか、オンラインでの法要や法話の動画配信など、あらたな取り組みを率先されていく寺院や僧侶が少なからずいらっしゃいます。さらに、多くの寺院で、従来の儀式や伝道にさまざまな工夫をこらし、この苦しい状況を乗り越えようとしておられます。

今回の調査では、こうした皆さまの創意工夫やご苦勞を、数値として正確に把握し分析を行うことで、今後の寺院運営に何らかのヒントをご提示したいと考えています。

さくじ

調査へのご協力をお願い

新型コロナウイルス感染症が流行する前から、寺院を取り巻く環境は厳しくなっていました。葬儀の簡略化などはそ

の代表的な例といつてよいでしょう(詳細は、本誌(二〇二〇年五月号)掲載の小谷みどり(第十一回宗勢基本調査実施センター調査研究員)執筆「統計からみる葬儀——つながりの変容が葬送に与える影響——」参照)。新型コロナウイルス感染症拡大の影響は、こうした現象をさらに加速化させているとも指摘されています。

お寺の未来を語るうえで、いまのお寺の実態を正確に把握することは不可欠です。みなさまのご苦勞や創意工夫、そして率直な思いをお聞かせください。

なお、今回からインターネットによる回答を受け付けています。積極的にご利用いただければ幸甚に存じます。

重ねて申しあげますが、第十一回宗勢基本調査へのご協力を、是非ともお願い申しあげます。今回の調査結果につきましても、丁寧に集計・分析し、宗門の未来のために活用させていただきます。

(第十一回宗勢基本調査実施センター)